KOBUNSHA

この本をお読みになった方へお願い

あなたはこの本を読まれて、どんな感銘を受けられたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。なお、このほかに、カッパ・ブックスではどんな本を読まれたでしょうか。このつぎには、どんな本を読みたいとお考えですか。

この本には、一字でも誤植がないようにと願っておりますので、もしも、お気づきの点がありましたら、あわせてお教えください。お手紙には、ご職業や年齢なども書きそえてください。

東京都文京区音羽町三ノ一九
光文社
神吉晴夫

うらなり先生ホーム話し —おヘソのつぶやき—

昭和37年4月10日 初版発行
昭和37年4月25日 6版発行

¥ 200

著者 渡辺一夫（わたなべかずお）
東京都文京区駒込富士前町48

発行者 神吉晴夫

印刷者 盛英信
東京都文京区関口町140

発行所 東京都文京区音羽町3 株式会社 光文社
振替東京115347

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。 （岩瀬製本）
表紙の模様・意匠登録 116613

© Kazuo Watanabe 1962

うらなり先生ホーム話し

―おへッのつぶやき―

渡辺一夫著

KOBUNSHA

除籍

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

まえがき

『うらなり先生ホーム話し』という奇妙な題名は、神吉晴夫氏の案によるものです。夏目漱石の『坊ちゃん』のなかに、「うらなり」という渾名をつけられた青ぶくれの先生が出てきますが、まさか、神吉氏が、ぼくを、この「うらなり先生」に見立てたわけではありますまい。四、五年前にカッパ・ブックスとして『うらなり抄』という拙文集を出してくれたことを、同氏は思い出し、「うらなり先生」という尊称を、ぼくに奉ってくださったのだと思っています。『うらなり抄』は、ぼく自身が選んだ題で、正式な文章もろくに書けないぼくが、塩酢のために書きつづった雑文抄という意味でした。しかし、思えば、本質的に、ぼくは、肉体的には青ぶくれではなくとも、精神的には、「うらなり先生」なのかもしれません。『ホーム話し』というのは、おそらく「座談」とか「浴衣がけ話し」とかいう意味でしょうから、別に差しつかえありませんが、どうもぼくの日本語でないような気がします。しかし、神吉社長が選んでくれた題名である以上、なにか、ぼくにはわからぬ魅力があるのかもしれません。そして、ぼくは、題に釣られて、この本を読まれる方がたのなかにも、題とは無関係に、この「うらなり」的雑文集に秘めた「うらな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

り先生」の気持ちをわかってくださる方がたがおられることを念願しています。

本書は、一九六一年度に『朝日ジャーナル』へ『ぶらり横丁』と題して何回か書きつづった「うらなり」的雑文に、若干の旧稿を加えて一巻にまとめたものです。その間、光文社カッパ・ブックス編集長伊賀弘三良氏、同部員渡辺英幸氏らから、いろいろと親切なご指示を得たことを記して置かねばなりません。

「老齢その任に耐えず」ということで、長年勤めさせていただいた東大を停年退職することになったぼくの迷言やら、長いあいだ巧みに、いわゆるリモート・コントロールで、ぼくの逸脱を防ぎ止めてくれた上に、一度も離縁してくれとは言わなかった老妻に対するぼくの感謝の念やら、衛生無害な恋人として孫娘と遊ぶ切ないぼくの心根などが、本書の主題となっているようです。まさに、老残の姿と申すべきでしょう。今まで迷い疲れたあげくのはてに、月なみな「あきらめ」とやらにしがみついているらしい自分を省みて、「やはり、ここへたどりついたのか？」と思うばかりです。フランスの何人もの作家は、人間は三十歳までのあいだに、その人間の持つべき問題を用意して、それから後は、それらの問題を解くために生きるのだというようなことを申しています。三十歳までに用意された問題が多ければ多いほど、その人の生涯は、豊かでしょうし、また同時に深い苦しみと激しい喜びとに満ちているはずです。その点、用意した問題の質量ともに上々でないぼくは、月なみで、ぼんやりしたあきらめにすがりつくようになったという

告白をしているにすぎますまい。しかし、ぼくは、若い方がたには、うんと迷いつつも歯を食いしばって立派に生き通すことを、また、年をとった方がたには、そうやすやすとあきらめずに、若い人々とともに、もう一度迷ってみてはと、おすすめしてみたいような気がいたしております。

なお、本書のために、小学校時代からの友人長岡忠三郎画伯が飾絵を、大江健三郎氏がぼくの紹介文を寄せてくださり、さらに、孫娘久野美起子が、カットを描いてくれたことは、うれしく思っています。

一九六二年三月

渡辺一夫

目次

まえがき　3
親バカ子バカ　9
A　親と子の距離　9
B　娘について　13
C　息子について　17
おめでたい話　27
ある横丁の幻（まぼろし）　33
針の穴を駱駝（らくだ）が通る　39
通訳ざんげ　47
軽い気持ちで人殺し……　53

水洗便所の便秘(べんぴ) 60
姓名妄談 69
孫娘との問答 70
物の怪(け)の戒(いまし)め 82
二十年後のめぐり合い 88
お金の人格 93
宿命の糸 99
日露戦争の思い出 105
忘れ得ぬチョビヒゲ先生 112
片目の老婆 110
通り魔 125

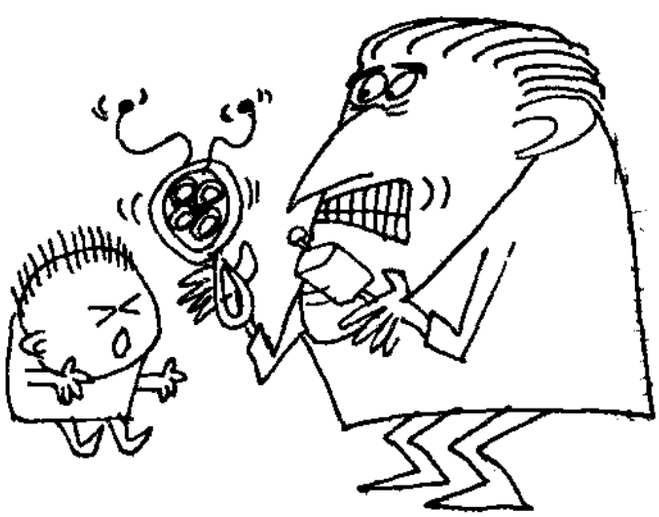
孤独と愛情　120
一たす一は一である　130
老妻をだますスリル　147
ある口髭の行方　151
もしも、あの時、ああしていたら……　158
アルバイト隠居　164
現代寓話　175
熊さん、八つぁん、覚悟はよいか？　187

カバー・白井正治
横尾忠則
カット・柳原良平

親バカ子バカ

A　親と子の距離

両親がまだ生きている時分のこと、こちらではそうと知らずに、両親の趣味に合わぬようなことをしでかしたためか、それとも少年らしいわけもわからぬ抵抗（レジスタンス）でもしたためか、――それは一つ一つ記憶していませんが、――両親にしかられ、これに対して口答えをしたために、さらに激しく叱責（しっせき）されて、「親がいなくなるとはじめて親の恩がわかる」ということが、いつか身にしみるであろう、といましめられたことがたびたびあります。思えば、ぼくは生意気で、両親を悩ましとおした少年だったらしいのです。両親の予言は的中しました。現在、両親は、ともに他界していますが、やや早婚だったぼくは、同年輩の友人のなかでは一番早くオジイチャマになる光栄まで与えられてしまい、さらに生意気な大学生の息子と対決せねばならなくなりますと、そぞろ



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

にのんきだった昔を思いおこし、まさに粛然・消然・憫然・愕然として、「親がいなくなるとはじめて親の恩がわかる」ということが、五臓六腑にしみわたるというよりも、五臓六腑の底から湧きあがることになりました。しかし、両親に、こんなことを言わせるような時期が、子供にとって一番楽な時代なのだとも思っています。

ぼくは、現在、長女とその弟との二人の子供と、長女が産んだ女の子――つまりぼくの孫娘とを相手にして、あっぷあっぷ言わねばならなくなっていますが、なんたる必然の、なんたる結果でしょう。しかし、ぼくは、亡き両親に「親がいなくなるとはじめて云々」と言われたことが、現在身にしみわたることは認めますけれど、そう言われた当時、「あんなことを言って、卑怯だ。恩を売りつける！」と思い、なにか反感めいたものをいだいた気持ちが、いまだに残っているせいか、ぼくの子供たちが、いくら生意気なことを言って反抗しても、両親が「いずれ身にしみるだろう」と予言したと同じことを、ぼくの口からはどうしても言えないのです。それを言ったら最後、娘も息子も、若いころのぼくと同じような反発を感ずるだけだろうと思います。その上、新時代的体裁もとりつくろいたいという、つまらぬ虚栄心もある結果でしょうか、かえりみて、「親の恩」を子供らに向かって暗示できるほどのことを、なに一つしていない後ろめたさのためでしょうか、子供らに悩まされることは日常であっても、そのようなことを言う資格は、ぼくにはないのだと思っています。

ぼくの両親は、普通の、ごくマッチョウの父母であり、ぼくが現在、オジイチャマになれたのも、なんとか世間体をとりつくろって生きてゆけるのも、みな両親のお陰に相違ありません。しかし、ぼくの両親とても、十全な神さまではありませんでしたから、ぼくから見て、ああしてほしかった、ああしないでほしかったというところがあるのも当然でしょう。そこで、ぼくは、二人の子供（娘と息子）に向かって、ぼくの両親がぼくにしてくれなかったようなことをしてやり、ぼくとして、してもらいたくなかったようなことをしないでいようと、いつのまにか決心（！）してしまったらしく、この決心の是非は別問題として、そのような線にそって、まず行動せざるをえなくなっているようです。

「両親がぼくにしてくれなかったこと」の大部分は、なにかとお金がかかるものですから、ああもしてやりたい、こうもしてやりたいと思っても、ぼくのささやかな理想は、十分の一も実現されていません。その上、娘も息子もぼくとは別個の「小宇宙」である以上、親がよかれと思ってしてやったことが、あまりお気に召さないこともあるし、苦心してやったことを、しごく当然のような顔をして、あたかもわれわれが水道の水を飲む時のように、冷淡で、ぞんざいな態度で受け取ってくれることもあります。しかし、いずれも当然な話で、ぼくは少々悲観はしますけれども、立腹をしたり、「親の恩」を口にしたりする勇気はまったくありません。つまり、ぼくがぼくの両親にしてもらえなかったことを、子供たちにしてやろうとすることは、ぼくの「悲願」

のいたすところでもあり、あるいは一種の義務かもしれませんが、しかも、それが子供たちの要求と食いちがっていても、これまた、いたしかたないのでして、だれを恨むべきものでもありますまい。おそらくぼくにしても、両親が苦心してくれたことを、冷淡に受けとったり、つまらぬと言ってはねつけたりしたことがたびたびあったことでしょう。結局のところ、親が子供のためと思って苦心することは、当たり前であり、その三分の一は、子供にあまり気に入らず、他の三分の一は当然しごくとして受け取られ、残りの三分の一に対して、かろうじて「ありがとう」と礼を言われることになるのかもしれませんし、「ありがとう」と言われなくとも、依然としていたしかたなく、依然として当たり前なのです。しかし、親というものは、心の底で、「これだけのことをしてやったのだから」というシュピリオリティー・コンプレックス(優越感)を持っているものでもあり、それを口に出す出さぬは別として、それにすがって生きてゆくものらしいのです。ですから子供に反逆されると、「親がいなくなるとはじめて……」などと、予言をしてしまうことになるのでしょうか？　こういう妙な反省があるから、なおさらのこと、ぼくは、子供たちに向かって、「いずれ身にしみてわかる」などとは申せないのです。こういうぼくの態度は、第一には、十分なことをしてやれないでいるぼくの後ろ暗さの結果には違いありませんが、ぼく自身のことをかえりみて、黙っていてもいずれ自然にわかってくれるだろうし、自然にわかったことのほうが強く心に刻まれるはずだなどと、はなはだ遠大で狡猾(こうかつ)なことを考えているところか

ら生まれるもののようです。

ぼくの両親がぼくにしてくれなかったものは多々あるようですが、ぼくにしてくれなかった方がよかったと思うこともいろいろとあります。おそらく、両親としては、よかれと思ってしてくれたことであるにかかわらず、それが、ぼくには気に入らず、「してくれなかった方がよかった……」などと現在でも考えるとは、ずいぶん勝手な話ですが、いたし方ありません。そして、こうした勝手な心根は、いわば罰せられているのかもしれず、前にも述べたとおり、ぼくは、娘や息子のために、よかれと思ってしてやったことが、娘や息子の気に入らず、おそらく、あとで、「あんなことをしてくれなかった方がよかったのに」と言われるに違いないような気がします。どうも人生は行き違いが多くて、思うようにゆきませんが、ぼくも年をとったせいか、こうした行き違いにみちた人生に対して、もはや腹立たしさや悲しみを感じなくなっているし、むしろ、滑稽になるし、人生というものは、こうしたトンチンカンなところがあるので、かえって生き抜くに値するのだとも思うようにもなっています。これは人生のたそがれ時の鼻歌かもしれません。

B　娘について

娘は戦争後、数年たってから嫁に行きましたが、ちょうど女学校を終わるころ、戦争騒ぎで、

ろくろく勉強もできず、すきな技芸を身につけることもできませんでした。その点は、じつにかわいそうだと思っています。疎開中にびっくりするほど大人っぽくなりましたが、戦争がすんでから、一家が久しぶりでいっしょに住めるようになり、苦しいながらも平和な日々が送れることになると、嫁入り前の娘として、いろいろなことがやりたくなったし、いろいろなものがほしくもなりました。戦争前にピアノを習っていましたが、疎開費用を捻出するために、娘をなだめすかして、そのピアノを売りはらいましたが、ぼくの心には深い傷が残ってしまいました。戦争後娘は、ピアノはあきらめはしたものの、遅れを取り戻すつもりか、いろいろなことをやってみたようです。ぼくは、娘のために、戦後ふたたびピアノを買いましたが、そのときには、娘はもう母親になっており、家事や子供の世話にかまけて、もとのように練習はできなくなっていましたし、指もうまく動かないと言って悲観するようにもなっていました。そして、待望のピアノも、まず、童謡などが、すこしずつわかるようになってきた子供(ぼくの孫)のおもちゃになり、ついで、先生について習いはじめた孫娘の練習用具になってしまいました。ぼくの娘は、ぼくに十分してもらえなかったことを、自分の子供(孫娘)にしてやろうとしているらしいのです。そして、孫娘は、「またピアノのお稽古か！　いやだな！」などと申します。ぼくは、妙にしーんとなった気持ちになってしまうのです。そして、ぼくは、心の傷口を撫でさするのです。もうたいして痛みはしませんが、傷痕は消えません。

終戦直後、娘はなにか習いたいが？　なにがよいかとたずねました。ぼくは、好きなものを習うのが一番よいけれど、将来、一人ぼっちになっても、なんとか食べてゆけるようなもの、そういう技術を身につけたらどうかしらと、はなはだ漠然たる忠告を与えました。娘は、フランス語を習ったり、速記を習ったりしたようですが、それを実地に活用する機会がなかなかきませんし、そうした機会を捕える術も心得ぬままに、要するに習ったという程度のことで、妻となり、母となり、現在では、フランス語も忘れ、速記もできなくなってしまっているようです。この種のことで比較的身についたらしく思われるものは、国文学方面のこと、とくに歌舞伎の観賞めいたことのようです。とは申せ、赤ん坊をかかえ家事に追いまわされている娘は、そう頻繁に芝居見物にも出かけられないらしいのです。しかし、月に一度か、二月に一度ぐらい、亭主の好意から、観劇に出かけることもありますが、そのときはじつに楽しそうです。亭主は生真面目なお医者さんで、ぼく以上に歌舞伎には興味をいだかぬらしい人ですが、よくまあサービスをしてくれるものだと、ぼくは感謝しています。娘には、妻として母として現在の生活に不満がいろいろあるに違いありませんが、こうして歌舞伎を味わうことによって、なにか精神の糧を得ているらしいのでけっこうだと思っています。娘は、長唄や洋画などもやりましたが、もはやピアノ同様に青春の思い出になりかけているようです。ぼくとしては、いまさらどうにもならぬことですが、娘に、やはり、もっと生活するために役だつものを習わせておいてやったほうがよかったと思っ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com